

そ はくげき あ み ぼうしうご ふうか むし おすじょうふう
夫れ白鷺の相い視るや、眸子運かさずして風化し、虫は、雄上風に
な めすかふう おう ふうか るい おの しゆう な ゆえ ふうか
鳴き雌下風に応じて風化す。類は自ずから雌雄を為す、故に風化
するなり。性は易うべからず、命は變うべからず、時は止むべから
ず、道は壅ぐべからず。苟くも道を得れば、自るとして可ならざる
はなく、焉れを失えば、自るとして可なるはなしと。

【大体の意味内容】

そもそも白鷺という水鳥が雌雄で見つめあうと、眸を凝らすことよって、それで感じあ
い、身ごもることになる。虫は、雄が風上で鳴くと雌が風下で応えて、それで感じあい身
ごもることになる。同類のものは自然と雌雄を為し、花粉が風に乗って受粉するようにし
て、新しい生命を宿すのだ。自然の性は移しかえることはできない。天命は變えるこ
とができない。時の流れは引き止められない。道が伸びてゆくのを塞ぎ止めることはでき
ない。もしもこの道のはたらきを体得できたなら、どんな場合にも万事うまくいく。しか
し、それを手放してしまうと、どんな場合にもうまくいかないのだ。

ギリシャ神話ですと、最高神ゼウスが白鳥などに変身して美女に近づき、結婚してしまう物語
が多いですが、日本の昔話や伝説には、女性が太陽の光そのものに感精して子どもを宿すといっ
たストーリーが多いです。豊臣秀吉などは、母親が夢で、太陽を呑みこんでしまって、それで実
際に妊娠し、生まれた。だから「日吉丸」と名付けられた、そういう伝説を持っています。

この『莊子』に限らず、世界共通で、異種類の間で婚姻するストーリーが成り立つ場合は必
ず、どちらかがどちらかの姿に変化して、同類の間での結びつく、という形を取ります。日本で

も例えば「鶴の恩返し」のように、人間に助けられた鶴が人間の女性の姿となって恩人と結ばれるパターンもありますが、日光それ自体に感精かんせいして特殊能力を持った子どもを産むお話もとても多いのです。この点「狂子」『狂子』その他の大陸の思想と、日本のような島国の思想との違いが感じられて興味深いです。日本は海に囲まれて、どこか自然と融合しあう、自然界とそのまま混ぜ合わせるようなおもしろさがあるように思えます。自然とは、恩恵をほぐす存在であると同時に「禍わざはひをもたらす脅威きょうゐでもあります。そのような両義性りょうぎせいある存在とも、うまく融合しあう、それが日本という風土に生きる人々の柔軟性であり、したたかさであり、雄大さでもあろうと思われま

す。